NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　３

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15280181

ダイの大冒険, アバン, ロカ, マトリフ, ヒュンケル, 子ヒュン, 勇者アバンと獄炎の魔王, フローラ(ダイの大冒険)

アバンがヒュンケルを育てる理由。
この言葉のためにこの物語はある、その１つ目の言葉。

あるべき未来に進むために　３

第３章　違和感

　ロカは、カール王城の廊下でマトリフに呼び止められた。
「よう、ロカ。今日は、アバンのやつは登城してないのか？」
　ロカは振り返り、マトリフに答えた。
「なんか、今日は用事あるって言ってたぜ。来ないんじゃないのか？」
「そうか・・・」
　マトリフは、ロカの返事を聞くと、難しい顔をしてロカに近づいてきた。
　ロカの耳元に口を寄せて、小声でささやいた。
「ロカ、アバンの身の回りに気を付けてやってくれ。
・・・あいつ、狙われてやがる。」
　マトリフの言葉に驚き、ロカは声を上げた。
「えっ！？どういうことだ、マトリフ！」
「馬鹿っ、声がでかい。」
　マトリフは、怒鳴りたい気持ちを抑え、小声でロカをたしなめると、城内の自室にロカを連れ込んだ。
　ロカを引っ張って自分の部屋に戻ってきたマトリフは、大げさにため息を吐いた。
「まったく・・・俺がわざわざ耳打ちした意味がないだろう・・・。」
　ロカは憮然としていた。
「だってよ、あんなセリフ聞いたら驚くだろ。どういうことなんだよ。」
　マトリフは、さらに大きなため息をついた。
「・・・お前、騎士団長だろ。主君を取り巻く政治的状況ぐらい把握しておけ。」
　そう言いながらも、マトリフは、この実直な騎士団長が、政治的駆け引きなどに忖度できないことはよくわかっていた。

マトリフは、声を落として、ロカに話しかけた。
「アバンのことをよく思ってない一派がいるのはわかっているな？」
　ロカはうなずいた。
「先王派、だよな。」
「その通り。現王の兄、先王の血統を正当とする連中だ。」
　マトリフはつづけた。マトリフが語る内容は、カール王国では、誰もが知りながらも言葉にできない玉座をめぐる争いだった。
「２０年近く前、先王が若くして亡くなられたとき、先王の王子はまだ幼い子どもだった。そのため、先王の弟たる現王が即位した。だったよな。」
　ロカはうなずいた。
　マトリフは、もともとカールの人間ではなかったが、ここしばらくの間、カール城内に居を構えている間に、相当の情報を収集したらしい。
　マトリフの語る内容は、カール古参の重鎮らが把握している政治的状況の理解と比して遜色のないものだった。
「先王派から見れば、現王は、先王の王子が成人するまでのつなぎでしかなく、王位を預けていただけのはずだった。
　ところが、ちょうど、先王の王子が成人したころから、魔王軍との戦いが始まった。現王は病弱だったが、実績のない若い王子よりはましだ、ということで、譲位は延び延び、その間に新たに注目を集めてしまったのが、国民に号令をかけて魔王軍に立ち向かった『希望の女神』フローラ王女。
　いまや、現王派は、先王の王子に王位を譲る気などさらさらなく、フローラ王女こそが次の女王にふさわしい、と考えている。
　これがカール王国の現状だったな。」
　マトリフの説明を聞きながら、ロカは、アバンの言葉を思い出していた。アバンがこれからやろうとしていること、アバンが望んでいることは、そんな王家の内紛には関係がなかったのだから。
「だけどよ、マトリフ。アバンは・・・。」
　だが、ロカの言葉をマトリフはすぐに制した。
「あいつの意向は関係ねえんだよ。あいつの存在そのものが、現王

派と先王派の起爆剤になりうるんだ。」
　ロカは、マトリフの言葉の意味がつかめず、いらだちを隠しきれぬまま、マトリフを問いただした。
「どういうことだよ。」
　マトリフはため息交じりに言葉をつづけた。
「先王派にとっては、現王は、早く退位してもらいたい。できれば、王女が幼い今のうちに死んでくれるとありがたい。」
「なっ・・・！」
　あまりに直接的なマトリフの言い方にロカは息をのんだが、マトリフは意にも介していない様子であった。
「ありていに言うと、そういうことだ。
　もちろん、現王派にとってはそれじゃあ困る。だが、現王が病弱なのは事実だ。早いとこ、王女への譲位を確かなものにして、フローラ王女にも、先王の影響のない後ろ盾が欲しい。
　そこで、現王派が目を付けたのが、勇者アバンだ。」
　ロカは、マトリフの言葉に反論した。
「けど、アバンには、今は地位も役職もない。それに貴族ったって、大した家柄じゃないぞ。」
　だが、その言葉は、マトリフにあっさりと切り返された。
「アバンの地位や家柄よりも、あいつが魔王を倒した勇者だってことと、民衆の支持が高いってことが重要なんだ。アバンがフローラ王女につけば、少なくとも、国民の支持は強くなる。先王派を抑えやすいってことだ。」
　マトリフは困ったことのように肩をすくめた。
「侍女たちなんか、フローラ王女とアバンはお似合いだなんて噂してるぐらいだしな。王だって、そのくらいのことは考えに入れていてもおかしくねえよ。」
　なんでこの老人は、若い侍女たちの噂話、それも王女の恋愛をめぐる憶測にまで詳しいんだとロカは思ったが、言葉には出さなかった。
「だがもちろん、先王派もその動きは十分承知している。それならば、さっさとアバンにカールを出て行ってもらう必要があるってことだ。アバンがぐずぐずしていたら、それだけじゃすまないことも

十分ありうる。」
「だったら・・・！」
　マトリフは、ロカの言いたいことはわかっていたが、それでは済まないであろうことも予測していた。
「先王派の中でも、過激な奴らは、アバンが出て行ったくらいじゃ安心できないだろうな。いつまたあいつが戻ってくるかわからない。それこそ、フローラ王女が年頃になって、さらに武勲の一つでも挙げられた日には、手が付けられないからな。」
　そして、マトリフは物騒な言葉を口にした。
「だから、先王派にとっては、アバンをカールに二度と戻れないようにするか・・・あるいは死んでもらうか。」
「なっ・・・！」
　言葉を失うロカに、マトリフは、厳しい眼差しで苦言を呈した。
「おい、ロカ、俺もただ若い姉ちゃんのケツを追い回すために城内にいるんじゃねえぞ。お前も剣の腕だけじゃなく、お偉いさん方の思惑も把握しとけ。」
　マトリフに何も言えず、立ち尽くしているロカに、マトリフは、厳しい色を消して、ロカに語り掛けた。
「だから、アバンの身の回りに気をつけろって言ってんだ。あいつは、変なところでお人よしだからな。自分の身の安全よりも、王やフローラ王女の立場を尊重しちまう。」
　マトリフも、ロカと同じ、アバンの欠点を承知していた。
　勇者アバンの最大の美徳であり、欠点であるところを。
「だから、お前が守ってやれ、ロカ。お前はあいつの相棒なんだからな。」
　マトリフは、ロカの肩にぽんと手を置いた。
「頼んだぞ。」
　ロカは、黙ってうなずいた。

「足元、お気を付けください。」
　アバンはそう言って、後ろを歩くフローラに手を差し伸べた。
　フローラは、スカートの裾を左手で軽くつまみ上げ、右手でアバンの手を取った。

二人は、森の中の獣道を歩いていた。
　アバンが、見せたいものがあるというので、フローラは、城を抜け出し、町娘のような恰好で、供も連れずにアバンと落ち合った。
　まだ早朝のこの時間、森の奥へとつながる道に人影はなく、朝露に濡れた下草をかき分けながら、二人は歩みを進めていた。
　まるで、人の世から切り離されたようだ。
　フローラはそんな感慨を抱いた。
　人間の持つ熱気はどこにもなく、澄んだ空気がしっとりと森全体を包み、薄い霧が漂っていた。
　城も街も何もなく、ただ勇者と呼ばれた男に導かれ、どこか別の世界にたどり着いてしまいそうな、そんな錯覚を覚えていた。
　アバンは、フローラが遅れないように、歩調を合わせて歩いていた。
　ときどき、後ろを振り返り、穏やかに微笑みかける。そんな些細な心遣いもフローラにはうれしかった。
　アバンは、森の奥に少し開けたところを見つけると、その手前で足を止めた。
「この辺ですかねえ・・・。」
　アバンは、独り言のようにつぶやき、目を凝らした。すると、彼は、何かを見つけたのか、一点で目を止め、にっこりと微笑んだ。
「うん、このへんでいいですね。
さっ、フローラ様、隠れましょう。しゃがんでください。」
　アバンの言葉に、フローラは面食らい、一瞬、言葉の意味を理解しかねた。

　フローラは、アバンと一緒に、木陰に身をひそめた。アバンが、口に指を１本当てているので、おしゃべりは禁物、ということらしい。
　フローラとアバンは、背を低くしてしゃがみこみ、じっと息をひそめた。
　すると、しばらくして、下草がざわめく音が耳に届いた。
—あ・・・！
　フローラが見つめる先に、下草をかき分けて、ひょっこりと小さ

な影が現れた。
　スライムだった。
　青いスライムは、ぷるぷると体を震わせて、大きな目できょろきょろとあたりを見回していた。
　やがて、彼は、体を震わせながら飛んではねると、一点で止まり、こちらに背を向けたまま、ぷるぷると体を震わせた。
　そして、そのまま、また震えながらどこかへと行ってしまった。
　彼が通り過ぎた後には、パンくずが落ちていた。
　しばらくすると、今度は、オレンジ色のスライムや、ぶち模様のスライムまで現れた。
　彼らは体を震わせて、飛び跳ねたり、立ち止まったりしている。
　よく見ると、彼らが跳ねているところには、パンやレタスやチーズやハムが点々と置かれていた。
　それぞれお気に入りがあるのか、思い思いのところで立ち止まり、体を震わせてパンやレタスやチーズやハムをほおばっている。
　ハムはみじん切りに切られて、小山の形に盛られていたが、瞬く間に崩されて、その崩れたハムの切れ端もほかのスライムが飲み込んでいた。
—かわいい・・・。
　フローラは、スライムの食事を見ながら、笑みをこぼしていた。
　だが、すぐに、フローラは、自分の中の違和感に気づいた。
—かわいい・・・？スライムが？
　フローラは、浮かんだ笑みを消し、戸惑った表情で隣のアバンに視線を送った。しかし、この感覚をどのように説明してよいのかわからず、フローラは別の問いをアバンに投げかけた。
　一応、彼らに気を使って、できるだけ小声で。
「あの食べ物は、あなたが置いたの？」
　アバンは得意げに答えた。
「はい。
　野生モンスターに餌付けはよくないですが、食性を調べるくらいのことでならいいかと思いまして。
　フローラ様、初めてご覧になったでしょう？スライムって、結構いろいろなもの食べるんですよね。」

楽しそうに語るアバンに、フローラは遠慮がちに尋ねた。
「危ないとは思わなかったの？」
「どうしてそう思われるんです？」
　アバンに尋ね返され、フローラは戸惑った。常識の範囲内のことだったからだ。
「だって・・・私たちはみんなそう教わってきたじゃない。
　スライムは小さいモンスターだけど、大群になることもあるし、人間を見るととびかかってくるから、気を付けるように、むやみに近づいたり、触ったりしてはいけないって。
　アバンも同じように言われていたでしょう？
　もちろん、歴戦の勇者であるあなたにとっては、何の問題もないのかもしれませんが・・・。」
　すると、当たり前のことのように、アバンは答えた。
「あの子たちは、人を襲いませんよ。」
「え？」
　戸惑うフローラに、アバンは、いつものように穏やかに微笑んだ。
「フローラ様、そろそろお腹すきませんか？
　私の家までご一緒していただけますか？ちょうど、ここに来る前に、朝ごはんの準備をしてきたんですよ。焼きたての温かいパンケーキをご馳走しますよ。」
　そう言って、来た時と同じように、アバンはフローラに手を差し出した。

　フローラは、アバンの自宅のダイニングに通された。
　キッチンでは、アバンがエプロンを付けて、パンケーキを焼いている。甘い、いい匂いが、ダイニングにまで運ばれてきた。
　待っている間、フローラが窓の外を見ると、アバンの家と、隣のロカ一家の家の間の中庭が見えた。
　中庭では、レイラが洗濯物を干していた。
　大きなシーツや、真っ白なおむつ、大人用のシャツや小さめのズボンなどを竿の上に順々に干していく。
　忙しく働くレイラの前には、小さな幼児を膝の上であやす少年

が、芝生の上に座っていた。
　明るい陽光に、少年の銀の髪がきらめいていた。
　幼児の柔らかそうな、桃色のふわふわした髪が綿毛のように風に遊ばれていた。
―・・・かわいい・・・。
　フローラは、窓の外の子供たちの様子にほほえましさを感じ、顔をほころばせた。
　今度は、違和感はなく、目の前に光景に素直に感じ入っていた。
　そうしているうちに、いつの間にかアバンが焼きたてのパンケーキをフローラの前に置いた。甘い匂いが一層濃くなった。
「どうぞ。
　ジャムはブルーベリーです。手作りですよ。」
　フローラもまだ若い女性、甘いものを出されると嬉しくなる。
「ありがとう、アバン。」
　フローラに笑みを向けられ、アバンも穏やかに微笑んだ。
　ふと見ると、アバンは別の大皿を手にしており、そこには、小さなふんわりとしたケーキのようなものが、いくつか載せられていた。やわらかな卵色が目に優しい。
　フローラの視線に気づき、アバンが答えた。
「ああ、これは、蒸しパンです。あの子たちに食べさせようと思って。
　マァムは、まだ固いものは食べられませんし、ヒュンケルも、味の濃いものは苦手ですから、一緒でいいかなと。
　ちょっと持って行ってきます。」
　そう言って、アバンは、勝手口から中庭に出て行った。
　まず、最初にアバンに気がついたマァムが、子供らしい歓声を上げた。つられてヒュンケルも振り返る。
　アバンは、ヒュンケルに蒸しパンの盛られた皿を渡すと、背を屈めたまま、何やらマァムと彼を指さして、説明するように言葉をかけているようだった。
　ヒュンケルは不機嫌そうな顔をアバンに向けたままだったが、蒸しパンの皿は素直に両手で持っていた。
　そして、アバンは、顔を上げて、レイラにも何か言ったようだっ

た。レイラが、アバンに礼を言うように頭を下げたのが見えた。
　声は聞こえなかったが、彼らの会話がなんとなく見て取れた。
　そうして、フローラが窓の外を見つめていると、アバンがダイニングに戻ってきた。
　アバンは、もう１枚のパンケーキが盛られた皿をキッチンから運んでくると、フローラの前の椅子に腰を下ろした。
「ああ、すみません。お待たせしました。
　さ、フローラ様、食べましょう。冷めちゃいますよ。」
　フローラは、アバンの家のダイニングで、遅い朝食をいただくことにした。

　アバンは、温かい紅茶をいれると、フローラの前に出した。ふわりとした香気が立ち上り、フローラの心を落ち着かせる。
「お砂糖は、大丈夫ですね。」
「ええ、ありがとう、アバン。」
　フローラが紅茶に砂糖を入れないことを知っていたアバンは、砂糖壺はあえて彼女の前には出さなかった。
「最近、行商人から買ったんですよ。ギルドメイン高地産の一番摘み茶（ファーストフラッシュ）です。」
　アバンは、得意げに披露した。
「ええ、おいしいわ。」
　フローラは、左手でソーサーを持ち、右手の指をカップの持ち手に通して、香りを楽しみながら、温かい紅茶を口に運んでいた。さすが大国の姫君、その些細な所作も優雅であった。
　フローラはアバンに礼を言った。
「今日は朝からありがとう、アバン。楽しく過ごせました。」
「いえいえ、フローラ様の息抜きになればと思いまして。」
　アバンは、いつものように穏やかに微笑んだ。
「それに、私も、フローラ様とお話ししたかったんです。」
　その言葉に、フローラはどきりとしたが、その動揺を気取られまいと平静を装った。
　アバンは、フローラの心情に気づいていないのか、いつもと同じひょうひょうとした口ぶりで話をつづけた。

「フローラ様、今日、森でお見せしたこと、どう思われました
か？」
　フローラの脳裏に早朝の森の中の光景がよみがえった。色とりど
りのスライムが、小さな食べ物をほおばっていた。
　あのとき、かわいらしいと感じた自分の感覚への戸惑いは、解決
されることはなくフローラの中にある。だが、それを説明する術を
持たず、フローラはおうむ返しに言葉を返した。
「・・・どう、とは？」
　フローラの困惑を見抜いていたかのように、アバンはフローラに
尋ねた。それは、質問の体をなしてはいたが、確認だった。
「戸惑ってらっしゃいましたよね。」
「・・・ええ・・・。」
　フローラはうなずくほかなかった。
　フローラは、アバンに尋ねた。それは、彼女が信じてきた常識の
かけらだった。
「アバン、あなたは、あのスライムたちは人を襲わないって言った
わね。でも、私たちは、前から、どんな小さなモンスターも油断し
てはいけない、集団で襲われることもある、見かけたら逃げなさ
いって、教わってきたわよね。」
　アバンもうなずいた。
「ええ、私たちが子供のころから、大人たちにそう教わってきまし
たね。」
　アバンは、穏やかな笑みを浮かべたまま、フローラを見つめた。
フローラは、目の奥に隠した戸惑いや、そのさらに奥に眠る気持ち
まで見透かされそうな気がして、アバンから目を逸らした。
　アバンは、子どもに語り掛けるように、ゆっくりと、優しく尋ね
た。
「フローラ様、もっとお小さい頃のこと、覚えていらっしゃいます
か？そうですね・・・フローラ様が４歳か５歳くらいの頃です。」
　アバンは、フローラよりももともと３歳年上だった。
　ただし、アバンは、今回の魔王討伐の際に、凍れる時の秘法を使
い、１年以上もの間、自らも止まった時間の中に取り残された。そ
のため、彼の時計の針は、約１年分、止まっていた。

フローラが４～５歳頃というと、アバンは７～８歳頃になる。
フローラは、記憶の糸を手繰り寄せた。４～５歳というと、幼児の記憶の限界だ。フローラの中にも、断片的な記憶しかなかった。
そういえば、フローラは、幼いころ、乳母と一緒に城の庭をよく散歩していた。そのときに、普通は日中にあまり見かけない、ドラキーが中庭の上を飛んでいるのが見えた。フローラが手を振ると、ドラキーが甲高い声で鳴いていた。
あのとき、乳母は、穏やかな眼差しでフローラを見ていた。
―姫様は生き物がお好きですね。
そう言っていた。
またあるときは、迷い込んできたおおきづちの子どもが城の中庭の片隅でうずくまっていた。親とはぐれたのだろう。ぐったりしていた。
フローラは、おおきづちの子どもにミルクを与え、毛布を掛け、体を温めた。端材を立てかけて、雨よけの屋根を作り、パンもあげた。何日間かそうしているうちに、元気になったのか、おおきづちの子どもは、いつの間にか中庭から姿を消していた。
またそれから、こんなこともあった。
城のバルコニーの手すりに、白いしっぽが揺れていた。フローラは、猫かと思って、バルコニーに出てみたら、大きなももんじゃが白いしっぽを揺らしてこっちを見ていた。
ももんじゃは、フローラと目が合うと、にいっと笑って飛び跳ねて行った。
そういえば、そんなこともあった。
魔王軍との戦いが激しくなる中、思い出すこともなくなっていた。
「・・・子どものころ、お城の中庭やバルコニーにも、モンスターが迷い込んでいたわ。でも、誰も襲われたりしなかったし、大人たちもモンスターを追い出そうともしていなかった・・・。」
アバンは、フローラの言葉に深くうなずいた。
「そうなんです。私たちがもっとずっと小さかった子どものころ、モンスターは、私たちにとって、ごく当たり前の存在でした。稀に、畑を荒らすことはあると聞きましたが、人間が襲われることな

どはほとんどありませんでした。」
　アバンは、いったん言葉を切った。
　穏やかな表情は消え、冷たいとも見えるくらいの、ひどく真剣な面で、アバンは言葉をつづけた。
「そして、いま、森は、また以前の光景に戻ろうとしている。」
　アバンは、時々、不意にこういう表情をする。普段の穏やかさや明るさとはかけ離れた、真剣な表情。それは、研ぎ澄まされた鋭利な刃物を思わせた。
　フローラは、アバンが重要なことを語ろうとしていることに気づき、彼の言葉を正面から受け止めた。
「それを、私に見せたかったの？」
　アバンは、先ほどと同じ、鋭利さを隠さないまま、言葉をつづけた。
「フローラ様、私は、ここのところ、ずっと違和感を覚えていました。
　私たちのこの世界は、今、本来の姿をしていないのではないか、と。」
　本来の姿。
　重い言葉がアバンの口からこぼれた。
　フローラは、アバンの言わんとする意味をすぐには理解できず、ただ彼の言葉に耳を傾けた。
　アバンは、ゆっくりと、言葉をつづけた。
「例えばです。
　ヒュンケルの父は、魔王軍の騎士でした。アンデッドモンスターです。もちろん、ヒュンケルは人間ですので、二人の間に血のつながりはないはずです。それなのに、あの二人は、血のつながり以上に、親子だったんです。」
　フローラは、ヒュンケルの素性は、すでにアバンから聞いていた。
　だが、単なる事実としてではなく、アバンの心情を挟んだ言葉は、フローラの心に重く響いた。
　血のつながり以上に親子だった。
　人間とモンスターなのに？

フローラの戸惑いをほぐすように、アバンはゆっくりと話をつづけた。
　言葉をつづけていくうちにアバンの意識は過去に飛んでいた。目の前のフローラを瞳に映していないかのような、どこか遠いところを見るような目で、アバンは語り続けた。
「ヒュンケルの父、バルトスさんは、騎士道精神にあふれた方でした。それは、剣を交えた私にはよくわかりました。
　その彼が、騎士の矜持をすべてかなぐり捨てて、私に向かって、床に額をこすりつけて懇願したのです。
　ヒュンケルに人間のぬくもりを与えてほしい、と。」
　アバンはそこで言葉を区切った。
　彼の脳裏には、今も地底魔城で対峙したバルトスの姿が焼き付いていた。
　誰よりも騎士として生きてきたバルトスが、ヒュンケルのためにアバンに頭を下げたのだ。死しても守るべき地獄門の扉を開けて。
　その重さは、アバンには、十分に理解できた。
　彼の隣には、バルトスと同じように、何よりも騎士の矜持を重んじる親友がいたのだから。
「ヒュンケルもまた、誰よりもバルトスさんを慕っていました。バルトスさんの崩れた亡骸にすがって泣き止まないくらいに。」
　アバンの耳には、父にすがって泣くヒュンケルの悲鳴が、いまも強く刻まれていた。
　アンデッドモンスターの父。
　人間の息子。
　その父の死に涙を流し、泣き叫ぶ少年。
　あのときから、アバンの中で何かが変わった。
　アバンは、言葉をつづけた。
「フローラ様、私は、ハドラーを倒したことは後悔していません。
　彼は、人間を家畜のように支配し、魔族優位の世界を作ろうとしていました。実際にハドラーの支配地域では、人間は、略奪や暴力、強制労働の犠牲になり、多くの命が失われています。それを私は見てきました。
　だから、私たちが生きていくために、ハドラーは絶対に倒さなけ

ればならなかったのです。
　それは、私にとっては、正義、でした。」
　アバンは、あえて過去形を使った。
「でも、その私の行為によって、バルトスさんは亡くなり、ヒュンケルはたった一人の家族を失いました。
　バルトスさんを私が直接、刃にかけたかどうかは関係ありません。私がハドラーを倒したことで、彼は存在ができなくなったのですから、同じことです。」
　アバンは、自らのへ弁解を一刀のもとに封じた。同情や慰めは求めていなかった。
　アバンは、いったん言葉を切った。
　そして、意識を過去から現在に戻し、視線を目の前のフローラに戻した。まっすぐに彼女を見つめ、迷いのない声で己の決意を口にした。
「だから、私は、バルトスさんのことを忘れてはいけないと思うのです。
　私の掲げた正義のために犠牲になった存在があったことを忘れないでいるために。
　私が正しいと信じたことが、ヒュンケルから家族を奪ったことを忘れないでいるために。
　たとえ、１００人中９９人が正義だと信じたことでも、たった１人にとっては悪であることはあるのです。
　万人にとっての正義などあり得ない。
　それを忘れてしまったら、私が心に掲げてきた信条は、正義ではなくなってしまうのです。」
　そして、ぞっとするほど冷ややかな口調で、アバンは、自分自身に侮蔑の言葉を投げかけた。
「それは、ただの独善だ。」
　フローラは、聞いたことのないような、アバンの冷たい声の響きに背筋を寒くした。その言葉の持つ色に、アバンの深淵を見た気がした。
　だが、アバンは、すぐにその気配を消した。
　アバンは、ふっと笑みを浮かべ、何か大切なものを、愛おしいも

のを見るかのような目をして、穏やかに言葉をつづけた。
「それでも、フローラ様、私の行いがたとえヒュンケルにとっての悪であったとしても、私は自分のやったことは後悔などしていませんよ。
　私は、自分の信じた道を貫いたんですからね。」
　そして、アバンは、少し遠い目をして、何かを思い出すようなまなざしをした。
「モンスターであったバルトスさんと、人間であるヒュンケルが誰よりも親子であったことは、私は希望だと思っています。
　ですが、それを美しいと思えば思うほど、やはり、いまの世界はどこかおかしいと思わざるを得ません。」
　フローラは黙ってうなずいた。そろそろアバンの言わんとしていることが理解できていた。
「私は、その違和感を見極めたい。いまの世界がどうなっているのかを。」
　アバンは、はっきりとした口調でその決意を明らかにした。
「私たちが今後、進んでいくべき未来を知るために。」
　それは、勇者アバンが、これから先を生きていく子供たちに残そうとしている遺産（レガシー）の探究だった。
　フローラは、誰よりもアバンを信じていた。彼の理解者でありたかった。だから、彼の力になりたかったし、求めるものを手にしてほしかった。
　だが、アバンの言葉は、フローラにとっては望ましくない未来を暗示していた。
　フローラは、アバンの顔を見ることができず、手元に視線を落としたまま、彼の言葉を聞いていた。ティーカップの底に残った紅茶は、すでに冷めていて、ほろ苦い。その茶色の水面に映るフローラの面は、カップの動きにつられ、揺れていた。
　フローラは、アバンの言葉が、遠くから聞こえてくるような錯覚を覚えた。
「フローラ様、財団の件、陛下には、明日、正式にお返事をします。ですが、姫には、その前にきちんとお話しておきたかった。」
　そしてアバンは、宣言をした。

「私は、カールを出ます。」

　カール王国は王制を敷いているが、貴族からなる議会も有していた。
　その議会は貴族院のみの一院制で、構成者となる議員は、有力貴族の世襲である。権限は、王に大きく後れており、もっぱら王の諮問機関にすぎなかった。
　その貴族院議長は、カール王城にほど近い王都の一等地に、広大な屋敷を有していた。領地の古城だけでなく、王都にも屋敷を有していることが有力貴族の筆頭らしさを感じさせた。
　その屋敷の一角で、貴族院議長を務める初老の男は、渋い顔をしていた。
「まったく、王にも困ったものだ。あの勇者の若造に大金を投じようとするなど。」
　カール国王がアバンに賛同した、新たな勇者の養成とそれを行う財団への投資のことが、男の脳裏にあった。
「困ったものですね。」
　議長にワイングラスを差し出しながら、若い男がこれに応えた。側近の一人なのだろうが、有力貴族の側仕えにしては、油断のならない危険な雰囲気を感じさせる男だった。
　議長は、ワインを口に運びながら言葉をつづけた。
「将来の脅威に備えるための投資というのであれば、カール王国に属する組織でなければ意味がない。それを王はわかっていないのだ。あのような若造にそそのかされおって・・・。」
　王への不満を口にしていた男は、次いで、勇者にも侮蔑の言葉を投げかけた。
「あの勇者は、貴族というには名ばかりの低い爵位しか持たない卑しい身分ではないか。その貧乏貴族に、王が気を引かれようとはな・・・。王としての矜持はどこにあるか。」
　そうして、グラスの中のワインを半分腹に収め、初老の男は、側近の若者に尋ねた。
「若いな・・・どこ産だ？」
「パプニカ産、３年ものです。」

「若いはずだな・・・今一つだ。」
「お取替えいたしましょうか？」
「いや、いい。この気分では、良い酒も台無しだ。」
　貴族の男は、一気に残りのワインをあおると、大きくため息を吐いた。
「病弱なのはいたしかたないとしても、だ。王たる者、国や国民の危機には、国をまとめ上げて決断をせねばならんというのに・・・いったい、あの王は、魔王軍の危機に何をしたのだろうな。」
　側近の男は、主の愚痴をなだめた。
「長い王国の歴史の中には、凡庸な王が就くこともありましょう。」
「平時ならまだしも。戦時にそれは困る。国家の存亡につながる。」
「今は平和になったのですから、良いのではありませんか。」
　議長の男は、首を横に振った。寄ってきたのか、次第にその言葉は不穏な色を帯びてきた。
「・・・いや、また同じような危機が起きんとも限らん。フローラ様は聡明だが、まだ幼い。有力貴族をまとめる力もあるまい。
　だが、議会は違う。諸侯の英知を結集できる議会こそが、国権の頂点であるべきなのだ。
　であれば、だ。無能な王には、退位していただくのが、国のためではないかな。
　無能な王族とともに、な。」
　主の意志を察し、側近の男は、恭しく頭を下げた。
「我が君の、仰せのままに。」
　その面には、剣呑な色が浮かんでいた。

　カール王城の一室で、王族の男は、怒りもあらわに、勝敗の決まりかけたチェス盤をひっくり返した。
「もうよい！」
「も、申し訳ございません！」
　遊戯の相手をしていたはずの従者は、主人の激高に顔色を変え、床に頭をこすりつけてわびた。

もちろん、彼に落ち度はない。
　ただ、うまく負けてやれなかっただけなのだ。
　従者は、何度も頭を下げ、チェスの駒を拾い集めると、逃げるように、主人の部屋を後にした。
　王族の男は、いらだちを抑えきれないまま、どさりとソファに座り込んだ。
「・・・俺は、カールの王族だぞ・・・！いずれ、王位を継ぐはずではなかったのか・・・！」
　カール王族のうち、先王の子である彼は、フローラ王女の従兄弟にあたる。最も現王に近い、高貴なる血筋の彼は、幼いころから、いずれ、この国を治めるようになるのだと言い聞かされ、育ってきた。
　最近は、フローラ王女が国民の支持を集めていることを知っているが、叔父である現カール国王が、フローラに跡を継がせたいというのなら、フローラを娶ってもいいと思っていた。そのくらいは譲歩する、と。
　それがどうだ。
　勇者だか、魔王討伐の功労者だか何だか知らないが、しょせん子爵家の当主に過ぎない若造が、王やフローラに近づいている。王宮では、あの若造は、フローラと似合いだとか、侍女どもが下品なうわさ話に花を咲かせている。
　ありえない。
　王の血筋は高貴なるもの。
　そこに、貴族とはいえ、低い爵位しか持たない下賤な者が立ち入ってよいはずがない。
「あんな男、カール王室には不要だ・・・！」
　怒りに目をみなぎらせ、王族の男は、勇者に呪詛を吐き出した。

　外敵の脅威が去れば、内紛が生じる。
　それは、どの国の歴史もたどってきた道だった。

　様々な思惑を飲み込み、王都の夜は更けていった。